

短大生と大学1.2年生のキャリア意識の比較検討 —探索行動とライフキャリア・レジリエンスに着目して—

湯 口 恭 子

抄録

本研究の目的は二点ある。一点目は、探索行動（キャリア探索・学生生活探索）とライフキャリア・レジリエンスは、キャリア意識にどの程度影響しているのかを検討することである。結果、探索行動がより強くキャリア意識に影響していることが明らかになった。二点目は、短大生と大学1.2年生を比較し、その共通点と相違点を検討することである。結果、ライフキャリア・レジリエンスの「継続的対処」、学生生活探索の「異質交流」、キャリア探索の「情報収集」がキャリア形成に重要であることが示唆された。

キーワード

探索行動、キャリア探索、学生生活探索、ライフキャリア・レジリエンス、キャリア意識

A Comparative Study of Career Consciousness between Junior College Students and First-and-Second Year College Students in University —Focus on Career Exploration and Life Career Resilience—

Yuguchi, Kyoko

Abstract

The purpose of this study has two points. The first is to examine how far exploratory behavior (career exploration / student life exploration) and life career resilience would influence the development of career consciousness. As a result, it became clear that exploratory behavior has a stronger influence on career awareness. The second is to compare junior college students with first-and-second year students in university, and examine their similarities and differences. The results suggest the importance of “continued handing” in life career resilience, “heterogeneous exchange” in student life exploration, and “information collection” in career development.

Key Words

exploration behavior, career exploration, student life exploration, life career resilience, career consciousness support

目次	1-3	学生生活探索
1. 研究背景と目的	1-4	本研究の目的
1-1 はじめに	2. 方法	
1-2 キャリア意識の発達	2-1	調査時期及び手続き
	2-2	調査対象者
	2-3	調査内容
	3. 結果	

- 3-1 因子分析と各尺度得点
- 3-2 男女差の検討
- 3-3 階層的重回帰分析
- 4. 考察
 - 4-1 探索行動とライフキャリア・レジリエンスの比較

- 4-2 共通点から見たキャリア意識との関連
- 4-3 短大生と大学1, 2年生との相違点
- 4-4 キャリア支援の検討
- 5. 今後の課題

1. 研究背景と目的

1-1 はじめに

社会生活への移行が高等教育卒業後へと移動し、大学、短大進学率は57.9%と約6割（文部科学省, 2018）になった。職業について本格的に考え、その準備に入るのも、大学生段階になってからとされている（後藤, 1996）。そのような中、大学は2010年2月の大学設置基準の改正により、社会的・職業的自立に必要な力を身につける働きかけを組織的に行うよう求められた。それによりキャリア教育の普及が促進され、短大生、大学生のキャリア形成への関心も高まっている。社会的・職業的自立を促すためには、社会生活への移行支援が重要と考えられるからである。

社会生活への移行には、キャリア探索の重要性が指摘されている。キャリア探索は、自己および職業、仕事、組織などの情報収集を目的とし、社会生活への移行に関りを持つ探究活動（Jordaan, 1963; Stumph, Colarelli, & Hartman, 1983; 安達, 2008）とされている。また、様々な情報源の中でも環境と自己の2つの情報源を重要としており、環境探索（職業や仕事など社会の情報を収集する）、自己探索（自分について考え、理解する）（Jordaan, 1963; Stumpf, colarelli, & Hartman, 1983）と呼ばれている。

先行研究によれば、大学生のキャリア探索はキャリア選択や発達とも関連しており、個人にとっての満足度を高めていた（Jordaan, 1963, Stumpf, Colarelli, & Hartman, 1983）。安達（2008）は自己効力の高い女子学生は低い女子学生よりキャリア探索を行っていることを報告している。大学生

を対象にした最近の研究では、目標達成に向けて行動を触発する機能（BAS）⁽¹⁾が高いほど、キャリア探索を行っており（Li, Guan, Wang, Zhou, Guo, Jiang, Mo, Li, Fang, 2015）、合理的問題解決を行う頻度が高い者ほど、キャリア探索をよく行っていることが示唆された（松田・高原, 2012）。これらのことは、キャリア探索とポジティブな活動力との関連を示すものと考えられる。児美川（2016）は、中央教育審議会（2011）の提唱する基礎的・汎用的能力に触れ、「根っこの部分で必要なのは、変化する社会に子供たちが出て行って、将来の自分を支えることのできる力」ととらえ、「変化への対応力とレジリエンス」と指摘している。

レジリエンスは心理学の領域では「回復力」と訳されることが多く（石垣, 2017）、国内では個人の特性に着目して尺度開発を行ったものが多い（村木, 2015; 佐藤・金井, 2017）。一方、レジリエンスに資質的要因と獲得的要因があるとした研究も行われている（平野, 2010）。キャリア形成の中では、キャリアレジリエンス⁽²⁾、ライフキャリア・レジリエンス⁽³⁾という概念も示されている。仕事（ワーク）と余暇（ライフ）は、生涯を通して表裏一体をなす活動であり、キャリア支援にはライフキャリアとしての観点も重要であることから（川崎, 1994）、ここではライフキャリア・レジリエンスに着目した。これらの先行研究は、大学生の社会生活への移行に貢献するものであり、キャリア探索とライフキャリア・レジリエンスに着目する意義があると言えるだろう。

1-2 キャリア意識の発達

社会生活への移行やキャリア探索に関わる意識を測定する尺度としては、下村・八幡・梅崎・田澤（2009）が開発したキャリア意識の発達に関する効果測定テスト「キャリア・アクション・ビジョン・テスト」（CAVT）⁽⁴⁾がある。

CAVTは、「アクション」（将来に向けての積極的な行動）と、「ビジョン」（やりたいことなどをどのくらい明確にして準備をしているか）の2つの下位尺度で構成される（下村他，2009）。両得点が共に高い者は就職活動の活動量が多く、内定先に満足しており（田澤・梅崎，2012）、初期キャリアにも概ね良い影響を与えていることも明らかになっている（梅崎・田澤，2013）。これらのことから本研究ではCAVTを使用し、キャリア意識（アクション・ビジョン）を測ることにした。

1-3 学生生活探索

キャリア意識には、学生生活が重要という指摘もあり（梅崎・田澤，2013）、学業・クラブ・サークルをバランスよく頑張っている学生が、もっとも将来設計が高く（溝上，2009）、キャリア探索を促す要因には、課外活動への参加が示唆されていた（Denault, Ratelle, Duchesne, Guay, 2019）。

それゆえ、本研究ではキャリア探索の他、学生生活探索という概念（他者との交流を拡大し、学業についての情報を求める行動）を加えた。ここでは2つの探索を総合して呼ぶ場合、探索行動（キャリア探索・学生生活探索）とする。

1-4 本研究の目的

本研究の目的は二点である。第一に、キャリア意識（アクション・ビジョン）の発達に、探索行動（キャリア探索・学生生活探索）とライフキャリア・レジリエンスがどの程度影響しているのかを明らかにする。そうすることで、キャリア意識の発達を検討できると考えられる。

第二に、短大生と大学1.2年生を比較し、そ

の共通点と違いを検討する。日本私立短期大学協会運営問題委員会（2007）の「私立短期大学の管理運営と活性化」によれば、「短期大学は2年という短い修業年限で教育の実を挙げるために、職業教育に重点をおきつつも、教養を持った即戦力としての免許、資格取得を中心とした教育が展開されてきた」とされる。修業年限の違いは当然、教育方針や内容にも反映される。短大生と大学1.2年生を比較し、その違いを明らかにすることで、短大生と、大学1.2年生のキャリア支援の検討に役立てることができるだろう。

2. 方法

2-1 調査時期及び手続き

2019年6月～7月にかけて、5つの関西圏私立大学（短期大学部を含む）と短期大学の教員7名（著者を含む）に無記名調査票を配布し、回収を依頼した。参加は強制ではなく自由回答であり、何ら不利益は生じないこと、個人が特定される心配はなく、本調査以外の目的では使用されないことなどを、調査票に明記した。

なお、本研究は研究・教育倫理委員会（関西大学大学院心理学研究科）の承認を得て、事前に教員から口頭説明を行い、承諾を得た者に対して実施した。

2-2 調査対象者

短期大学1.2年生136名（男性26名・女性105名・その他⁽⁵⁾5名、1年生45名・2年生91名）、大学1.2年生354名（男性243名・女性110名・その他1名、1年生177名・2年生177名）から調査票を回収し、分析対象とした。

2-3 調査内容

属性として、学部、学年、性別、短大生には就職か進学（編入）などの進路希望について尋ねた。

(1) キャリア探索

Stumpf et al. (1983) を参考に、安達が開発したキャリア探索に関する日本語版尺度 (安達, 2008, 2010) を使用した。自己探索は「自分の長所や短所について考える」「自分の好きなこと、得意なことについて考える」などの6項目とし、環境探索は「興味がある仕事に関する情報を集める」「将来の仕事について友人や先輩、家族などから話を聞く」などの14項目とした。なお、環境探索は安達 (2008, 2010) の他、若松 (2006) を参考に一部項目を追加して使用した。入学してから今までを振り返って、「全く行っていない」「あまり行っていない」「少しは行っている」「まあまあ行っている」「非常によく行っている」の5件法で回答を得た。

(2) 学生生活探索

「他大学や他学部の学生と交流する」「興味のある学問領域の教員に直接話を聴く」などの12項目について、入学してから今までを振り返って、「全く行っていない」「あまり行っていない」「少しは行っている」「まあまあ行っている」「非常によく行っている」の5件法で回答を得た。項目は湯口 (2016) を追加、修正して使用した。

(3) ライフキャリア・レジリエンス

高橋・石津・森田 (2015) の成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度 (短縮版) を使用した。「すぐに成果が出なくても、今できることをやるのが大事だと思う」「常に新しいチャンスを見逃さないように準備している」などの20項目について、「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまる」「非常によくあてはまる」の6件法で回答を得た。

(4) キャリア意識

下村他 (2009) のCAVTの達成版を使用した。

「学外の様々な活動に熱心に取り組む」「何事にも積極的に取り組む」(アクション)、「将来のことを調べて考える」「自分が本当にやりたいことを見つける」(ビジョン)などの12項目について、どの程度達成できていると思うかを、「できていない」「あまりできていない」「どちらともいえない」「ややできている」「かなりできている」の5件法で回答を得た。

3. 結 果

3-1 因子分析と各尺度得点

キャリア探索、学生生活探索は主因子法により因子を抽出し、プロマックス回転を行った。因子数はスクリー基準に準拠しつつ、先行研究の因子数や解釈可能性を考慮して決定した。また、因子負荷量と共通性、累積寄与率、 α 係数を検討の上、不十分な項目を削除し、因子分析を反復した。各項目得点の平均を算出し、各尺度得点とした。

(1) キャリア探索

3因子16項目が抽出された。結果を表1に示す。第1因子6項目を「情報収集」($\alpha = .883$)、第2因子5項目を「自己理解」($\alpha = .861$)、第3因子5項目を「他者から学ぶ」($\alpha = .774$)とした。因子名は安達 (2008) に従った。

(2) 学生生活探索

2因子10項目が抽出された。結果を表2に示す。第1因子6項目を「学業」($\alpha = .872$)、第2因子4項目を「異質交流」($\alpha = .725$)と命名した。

(3) ライフキャリア・レジリエンス

成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度 (短縮版) の α 係数は.84から.94であり (高橋他, 2015)、信頼性が確認されていることから、高橋他 (2015) の先行研究通り、5因子構造とした。第1因子4項目を「長期的展望」($\alpha = .865$) (すぐに成果が出なくても、今できることをやるのが大事だと

表1 キャリア探索因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

N=479

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
【情報収集】（環境探索）$\alpha = .883$				
9 興味がある仕事に関する情報を集める	.898	-.040	-.096	.635
11 興味がある仕事に就くにはどの様に活動すれば良いのか調べる	.888	.001	-.067	.692
12 興味がある仕事で必要とされる知識や資格について調べる	.869	-.014	-.080	.649
20 興味のある進路の特定の領域について情報を探す	.666	.021	.131	.596
19 特定の職務や会社について情報を手に入れる	.543	-.039	.327	.613
7 本や雑誌、インターネットなどで仕事や働くことに関する記事を読む	.460	.091	.076	.330
【自己理解】（自己探索）$\alpha = .839$				
1 自分の長所や短所について考えてみる	-.086	.813	.067	.533
3 自分が嫌いなこと、不得意なことについて考えてみる	.084	.743	-.094	.539
2 自分の好きなこと、得意なことについて考えてみる	.164	.711	-.146	.552
4 自分という人間について考えてみる	-.055	.700	.082	.470
5 これまでの自分の生き方について振り返ってみる	-.076	.595	.131	.383
【他者から学ぶ】（環境探索）$\alpha = .774$				
16 キャリアセンターなどに就職のことを相談に行く	-.073	-.024	.823	.529
14 就職に関する説明会や講演会を聴きに行く	.015	-.020	.723	.462
18 興味のある仕事に就いた人を探して、直接話を聴く	.222	-.052	.621	.555
15 インターンシップに参加する	-.109	.061	.522	.244
13 社会人から仕事や働くことについて話を聴く	.142	.145	.438	.339
累積寄与率 52.93%	因子間相関			
余剰項目	1	—	.364	.562
17 興味がある仕事で必要とされる資格に挑戦する	2	—	—	.146
10 将来の仕事について友人や先輩、家族などから話を聴く				
6 これからの自分の生き方について想像してみる				
8 仕事や働くことをテーマにしたTV番組を観たり、講演会を聴きに行く				

表2 学生生活探索因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

N=479

	第1因子	第2因子	共通性
【学業】$\alpha = .872$			
27 興味のある学問領域の教員に直接話を聴く	.799	-.005	.583
31 履修している学問の担当教員に質問や相談に行く	.761	-.042	.522
28 興味のある学問について情報を集める	.733	.017	.507
32 興味のある学問テーマの研究を深める	.721	.000	.464
29 学問をテーマにした講演会を聴きに行く	.711	.054	.487
30 本や雑誌、インターネットなどで学問に関する記事を読む	.636	.030	.420
【異質交流】$\alpha = .725$			
22 初対面の人と交流する	-.086	.813	.433
21 他大学や他学部の学生と交流する	.084	.743	.386
23 外国人（留学生を含む）と交流する	.164	.711	.273
26 世代の異なる人と交流する	-.055	.700	.225
累積寄与率 47.37%	因子間相関		
余剰項目	1	—	.422
25 町内や地域の人たちと交流する			
24 会ったことのない人たちとネットやスマホで交流する			

思う、ものごとは長い目で見て考えることが大事だと思う)、第2因子4項目「継続的対処」($\alpha = .816$) (常に新しいチャンスを見逃さないように準備している、経験したことがないような出来事が起きても落ち着いて行動できる)、第3因子4項目を「多面的生活」($\alpha = .924$) (人生では、仕事以外に楽しめるような趣味を持ちたいと思う、人生では、仕事以外の活動でも満足感を得たいと思う)、第4因子4項目を「楽観的思考」($\alpha = .820$) (将来について楽観的である、物事が思ったように進まない場合でも、きっと何とかかなると思う)、第5因子4項目を「現実受容」($\alpha = .762$) (必要に応じて、目標のレベルを下げるができる、現実合った目標を立てることができる)とした。

(4) キャリア意識

下村他 (2009) のCAVTの α 係数は.83から.92であり、信頼性が確認されていることから、下村他 (2009) の先行研究通り2因子構造とした。第1因子6項目を「アクション」($\alpha = .792$) (学外のような活動に熱心に取り組む、尊敬する人に合

える場に積極的に参加する)、第2因子5項目「ビジョン」($\alpha = .861$) (将来のビジョンを明確にする、将来の夢をはっきりさせ、目標を立てる)とした。

3-2 男女差の検討

男女別の検討を行うために、探索行動(キャリア探索・学生生活探索)、ライフキャリア・レジリエンスの各下位尺度得点について、 t 検定を行った(表3)。その結果、短大生の「他者から学ぶ」($-3.08, df=126, p<.01$)と大学1.2年生の「自己理解」($-2.10, df=347, p<.05$)「異質交流」($-2.57, df=348, p<.05$)の得点については、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。有意差はごく一部でしか見られなかったことから、本研究では、男女を統合したデータを用いた。

3-3 階層的重回帰分析

探索行動(キャリア探索・学生生活探索)とライフキャリア・レジリエンスがキャリア意識(アクション・ビジョン)にどう関連しているかを検

表3 各指標の平均値と標準偏差およびt検定の結果

		短大生					大学1.2年生				
		男性		女性		t 値	男性		女性		t 値
		M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
キャリア探索	情報収集	2.37	0.79	2.43	0.66	-0.46	2.23	0.75	2.12	0.74	1.25
	自己理解	3.55	0.94	3.45	0.73	0.63	3.47	0.78	3.65	0.75	-2.10*
	他者から学ぶ	1.88	0.75	2.46	0.85	-3.08**	1.88	0.75	1.98	0.82	-1.06
学生生活探索	学業	2.42	1.04	2.26	0.81	0.85	2.06	0.84	1.91	0.83	1.52
	異質交流	2.64	0.94	2.54	0.91	0.53	2.75	0.97	3.03	0.87	-2.57*
ライフキャリア・レジリエンス	長期的展望	4.58	1.05	4.58	0.98	-0.01	4.77	0.85	4.83	0.73	-0.63
	継続的対処	3.76	1.00	3.41	0.89	1.70	3.78	0.98	3.75	0.84	0.21
	多面的生活	5.06	1.19	5.13	1.03	-0.30	5.33	0.84	5.40	0.82	-0.74
	楽観的思考	3.96	0.97	3.94	1.07	0.07	4.11	1.12	4.28	0.97	-1.34
キャリア意識	現実受容	4.03	1.17	4.00	0.95	0.16	4.04	0.86	4.11	0.75	-0.75
	アクション	3.25	0.84	3.24	0.70	0.07	3.27	0.85	3.30	0.69	-0.28
	ビジョン	3.13	0.84	3.27	0.80	-0.78	3.15	0.97	3.01	0.78	1.45

* $p<.05$, ** $p<.01$

討するため、キャリア意識を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。step 1で探索行動（キャリア探索3因子・学生生活探索2因子）、step 2でライフキャリア・レジリエンス5因子を説明変数として投入した。VIFは1.21から2.63であり、いずれも10.0を下回っており、不適切な標準偏回帰係数は見られなかった。よって、多重共線性の問題はないと判断された。

(1) キャリア意識（アクション）との関連

結果を表4に示す。step 1（短大生： $\Delta R^2 = .283, p = .001$ ；大学1.2年生： $\Delta R^2 = .464, p = .001$ ）、step 2（短大生： $\Delta R^2 = .464, p = .001$ ；大学1.2年生： $\Delta R^2 = .551, p = .001$ ）とも R^2 増分が有意になり、有意な回帰式を得られた。短大生、大学1.2年生の双方に有意に関連していたのは、学生生活探索の「異質交流」（短大生： $\beta = .188, p < .01$ ；大学1.2年生： $\beta = .355, p < .001$ ）、ライフキャリア・レジリエンスの「継続的対処」（短大生： $\beta = .308, p < .001$ ；大学1.2年生： $\beta = .256, p < .001$ ）

であった。異質な他者との交流を行い、思うようにならなくても継続的に対処している学生ほど、アクション得点が高かった。また、 β の値から、異質な交流は大学1.2年生の方が高いことが示唆された。

短大生と大学1.2年生の違いでは、大学1.2年生のみアクションに有意に関連していた項目があった。キャリア探索の「自己理解」（大学生1.2年生： $\beta = .180, p < .001$ ）とライフキャリア・レジリエンスの「長期的展望」（大学生1.2年生： $\beta = .142, p < .01$ ）であった。短大生の「長期展望」も有意ではないものの、大学と同程度の係数であった。自分について知ることや長期的な視点を持つ大学1.2年生は、アクション得点が高かった。短大生のみアクションに有意に関連していた項目は「情報収集」であった。「情報収集」をしている短大生は、アクション得点が高かった。

(2) キャリア意識（ビジョン）との関連

結果を表5に示す。step 1（短大生： $\Delta R^2 = .373,$

表4 階層的重回帰分析の結果（キャリア意識：アクション）

		短大生 (n=127)		大学1.2年生 (n=320)	
		Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
変数		β (標準偏回帰係数)		β (標準偏回帰係数)	
キャリア探索	情報収集	.286*	.277*	.116*	.073
	自己理解	.088	-.013	.290***	.180***
	他者から学ぶ	-.024	-.063	.122*	.085
学生生活探索	学業	.191	.164	.015	.038
	異質交流	.219**	.188**	.394***	.355***
ライフキャリア・レジリエンス	長期的展望		.157		.142**
	継続的対処		.308***		.256***
	多面的生活		-.016		-.012
	楽観的思考		.073		-.004
	現実受容		.002		.008
決定係数 (R^2)		.312***	.507***	.472***	.565***
調整済 (R^2)		.283***	.464***	.464***	.551***
		$F(5,121) = 10.957$	$F(5,116) = 9.166$	$F(5,315) = 56.364$	$F(5,310) = 13.174$

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

$p=.001$ ；大学1.2年生： $\Delta R^2=.428, p=.001$ ）、step 2（短大生： $\Delta R^2=.463, p=.001$ ；大学1.2年生： $\Delta R^2=.471, p=.001$ ）とも R^2 増分が有意になり、有意な回帰式が得られた。短大生、大学1.2年生の双方に有意に関連していたのは、キャリア探索の「情報収集」（短大生： $\beta=.506, p<.001$ ；大学1.2年生： $\beta=.541, p<.001$ ）、ライフキャリア・レジリエンスの「継続的対処」（短大生： $\beta=.235, p<.01$ ；大学1.2年生： $\beta=.211, p<.001$ ）であった。将来のための情報収集を行い、思うようにならない場合にも継続的に対処できる学生は、ビジョン得点も高かった。短大生と大学1.2年生の違いでは、大学1.2年生のみビジョンに有意に関連していた項目があった。学生生活探索の「異質交流」（大学1.2年生： $\beta=.127, p<.01$ ）であり、異質な他者との交流を行う大学1.2年生は、ビジョン得点が高かった。

4. 考 察

本研究の第一の目的は、キャリア意識（アクシ

ョン・ビジョン）の発達に、探索行動（キャリア探索・学生生活探索）とライフキャリア・レジリエンスは、どの程度影響しているのかを明らかにすること、第二の目的は、短大生と大学1.2年生を比較し、その共通点と相違点を検討することであった。そこで重回帰分析の結果に基づき、探索行動とライフキャリア・レジリエンスを比較し、短大生と大学1.2年生の共通点と相違点について考察する。

4-1 探索行動とライフキャリア・レジリエンスの比較

探索行動がキャリア意識（アクション・ビジョン）により強く影響していた。社会生活への移行に向けてキャリア意識を高めるには、探索行動を活発化させることが重要と考えられる。

一方、 ΔR^2 の変化量から見ると、短大生の方がライフキャリア・レジリエンスの影響を受けていることが示唆された。短期間で就職や編入等の意思決定を行う短大生にとっては、ライフキャリア・

表5 階層的重回帰分析の結果（キャリア意識：ビジョン）

		短大生 (n=127)		大学1.2年生 (n=320)	
		Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
変数		β (標準偏回帰係数)		β (標準偏回帰係数)	
キャリア探索	情報収集	.495***	.506***	.574***	.541***
	自己理解	.048	-.029	.113*	.040
	他者から学ぶ	.023	-.009	.048	.006
学生生活探索	学業	.158	.124	-.086	-.058
	異質交流	-.083	-.107	.158***	.127**
ライフキャリア・レジリエンス	長期的展望		.169		.077
	継続的対処		.235**		.211***
	多面的生活		-.054		-.038
	楽観的思考		.000		.036
	現実受容		.024		-.051
決定係数 (R^2)		.398***	.506***	.437***	.487***
調整済 (R^2)		.373***	.463***	.428***	.471***
		$F(5,121)=15.982$	$F(5,116)=5.073$	$F(5,314)=48.663$	$F(5,309)=6.138$

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

レジリエンスも重要と考えられる。キャリア支援においても、精神的に余裕がない状態を考慮する必要があるだろう。

4-2 共通点から見たキャリア意識との関連

結果から、キャリア意識の発達に重要なのは、以下の三点と考えられる。第一は、困難な状況でも継続的に対処するライフキャリア・レジリエンスを持つこと、第二は、今までとは質の異なる対人交流を行うこと、第三は、将来に向けての「情報収集」を積極的に行うことである。特に第三の「情報収集」は、短大生と大学1.2年生のビジョンに強い関連を示していた。「情報収集」が将来のイメージにつながった可能性が考えられる。

4-3 短大生と大学1.2年生との相違点

(1) 短大生にのみ関連したこと

アクションについて、大学1.2年生には関連がないのに、短大生に関連があったのは、キャリア探索の「情報収集」であった。短大生は時間に余裕がない分、早くから将来に向けての準備に入る。そのため、情報収集した結果がすぐにアクションとして現れた可能性がある。一方、大学1.2年生は、情報を集めるのみで終わってしまったのではないだろうか。これらの結果は十分想定できるものではあるが、量的分析の結果からも示されたと言えよう。

(2) 大学1.2年生にのみ関連したこと

アクションについて、短大生には関連がないのに、大学1.2年生に関連していた項目が、キャリア探索の「自己理解」と、ライフキャリア・レジリエンスの「長期的展望」であった。大学生は短大生と異なり、修業年限が長い。そのため、1.2年生段階では、興味や関心を探る自己理解が有効に働いた可能性がある。また、長期的な視点でのライフキャリア・レジリエンスは、困難さを乗り越えてアクションの達成度に寄与すると考えられ

る。

一方、自己理解などのキャリア支援は、短大生にも行っているはずであるが、アクションとは関連していなかった。短大生の場合、資格取得や専門性を活かした就職をすることを、大学生より意識する傾向がある⁶⁾。そのため、すでに自己理解ができていてと感じている学生がいる一方、短期間での自己理解が難しかった可能性も考えられる。

ビジョンについて、大学1.2年生のみ関連していたのが、キャリア探索の「異質交流」であった。「異質交流」はアクションに関して、短大生、大学1.2年生とも関連していたが、ビジョンに関しては大学1.2年生のみとなったことは興味深い結果であろう。アクションだけではなく、ビジョンにつながる「異質交流」には、一定の時間の他、交流の質も影響しているのではないだろうか。湯口(2018)は、学内、学外問わず「友人交流」がアクション得点を高めるのに、学内の交流だけではビジョン得点とは関連しなかったことを報告している。

4-4 キャリア支援の検討

先にも述べたように、短大生の方がライフキャリア・レジリエンスの影響を受けていた。修業年限は短くても、焦らずに納得のいく意思決定を行うためには、精神的健康は欠かせない。これまでのキャリア支援と合わせて、ライフキャリア・レジリエンスやメンタルヘルスの要素を取り入れた教育や支援を検討する価値があるだろう。

移行後の社会生活への影響について、キャリア意識のアクションとビジョンの違いを報告した先行研究がある。梅崎・田澤(2013)は、アクションを高めることは内定を得ることにつながるものの、早期離職にも正の影響があるとした。一方、ビジョンを高めることは内定を得るだけではなく、内定満足度や早期離職の防止にもつながっていることを示している。これらのことから短大生、大学生にとって、ビジョンの促進が重要であると考

えられる。

学生生活でビジョンを促進するためには、いつもと同じ人間関係の枠から一步踏み出すことが必要である。異質な他者との交流をきっかけに「自己と対峙し、将来についてよく考える」ことが重要だろう。古田（2018）は、学生生活の3側面（勉強、サークル、アルバイト）のうち、勉強への意味づけの深さが職業観やアクション、ビジョンともっとも関連したと示した。探索行動を積極的に行うだけではなく、探索行動をきっかけにして、そこから何を導き出せるかという「意味づけ」の重要性が示唆されたとも言えるだろう。

5. 今後の課題

最後に本研究の今後の課題として、以下の二点があげられる。第一に、本研究は関西近郊の複数の短期大学と大学を対象としたものであり、性別および短期大学の学年人数は統制できておらず、本研究のみをもって一般化することはできない。

第二に、本研究は、探索行動（キャリア探索・学生生活探索）とライフキャリア・レジリエンスがキャリア意識（アクション・ビジョン）にどう関連しているかを明らかにし、短大生と大学の1・2年生を比較したものである。今後はキャリア探索とライフキャリア・レジリエンスとの関係性や、学生生活探索とキャリア探索との関係性についても明らかにする必要がある。このように、探索行動の意義をより明らかにしていくことで、大学生の進路選択と社会移行に関する有効な手がかりを得られるであろう。

謝辞

本研究実施にあたり、調査にご協力下さった教員、学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

(注)

- (1) BASは動機づけシステムの一つで、目標の達成に向けて行動を触発する機能を担うとされ、行動活性化システム (behavioral activation system: BAS) とされ

る(高橋, 山形, 木島, 繁樹, 大野, 安藤, 2007)。

- (2) キャリアレジリエンスとは、「キャリア形成を脅かすリスクに直面した時、それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性」(児玉, 2015) とされる。
- (3) ライフキャリア・レジリエンスとは、仕事や職業だけではなく、ライフの視点も含めて人生を生き抜くレジリエンスのことであり、高橋・石津・森田(2015)は、「不安定な社会の中で、自らのライフキャリアを築き続ける力」と定義した。
- (4) CAVTは新規学卒労働市場研究を踏まえており、調査には大学を卒業して2年後の者も含まれている。大学生が日常生活でどのようなことを目標としているのかの調査を丁寧に行い、学生自らが自分のキャリア意識の発達を知る質問項目として、幅広く使用可能な汎用性の高い尺度である(梅崎・田澤, 2013)。
- (5) 性的少数者への配慮として、性別を特定しない「その他」を調査票回答項目に追加した。
- (6) Benesse教育開発センター(2013)によれば、短大生の進学理由は、第1位「資格や免許を取得したい」第2位「専門的な勉強・研究がしたい」なのに対し、大学の進学理由は、第1位「大学で過ごすこと自体が人生経験として貴重だと思ったから」、第2位「先行き不透明な時代に、大学くらい出ていないといけないと思ったから」となっている。

引用文献

- 安達智子 女子学生のキャリア意識—就業動機, キャリア探索との関連— 心理学研究, 79, (2008), 27-34.
- 安達智子 キャリア探索尺度の再検討 心理学研究, 81, (2010), 132-139.
- Benesse 教育研究開発センター 高校データブック2013, (2013)
- 中央教育審議会 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申) 文部科学省, (2011)
- Denault, A. S., Ratelle, C. F., Duchesne, S., & Guay, F. Extracurricular activities and career indecision: A look at the mediating role of vocational exploration. *Journal of Vocational Behavior*, 110, (2019), 43-53.
- 古田克利 学生生活の意味深さと職業観およびキャリア意識との関連 キャリア教育研究, 37, (2018), 1-10.
- 後藤宗理 社会参加に伴う新しい人間関係 斎藤誠一(編) 人間関係の発達心理学4, 青年期の人間関係 培風館(1996), 85-108.
- 平野真理 レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成— パーソナリティ研究, 19, (2010), 94-106.
- 石垣琢磨 レジリエンス—予防と健康生成のために— 臨床心理学 金剛出版, 17, (2017), 603-606.
- Jordaan, J. P. Exploratory behavior: The formation of self and occupational concepts. In D. E Super (Eds.), *career development; self-concept theory*. New York:

- College Entrance Examination Board, (1963), 42-78.
- 川崎友嗣 米国におけるキャリア発達研究の動向 日本労働研究雑誌, 409, (1994), 52-61.
- 児美川孝一郎 これからの私学の求められる教育のあり方 東京私学教育研究所報, 81, (2016), 3-48.
- 児玉真樹子 キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発 心理学研究, 86, (2015), 150-159.
- Li, Y., Guan, Y., Wang, F., Zhou, X., Guo, K., Jiang, P., . . . & Fang, Z. Big-five personality and BIS/BAS traits as predictors of career exploration: The mediation role of career adaptability. *Journal of Vocational Behavior*, 89, (2015), 39-45.
- 松田侑子・高原美央 大学生における就業動機, 問題解決スタイル, キャリア探索の関連 東洋学院大学紀要, 6, (2012), 299-304.
- 溝上慎一 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, (2009), 107-118.
- 村木義孝 レジリエンスの統合的理解に向けて—概念的定義と保護因子に着目して— 東京大学大学院教育学研究紀要, 55, (2015), 281-289.
- 文部科学省 平成30年度学校基本調査, (2018).
- 日本私立短期大学協会運営問題委員会 私立短期大学の管理運営と活性化, (2007).
- 佐藤暁子・金井篤子 レジリエンス研究の動向・課題・展望—変化するレジリエンス概念の活用に向けて— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 64, (2017), 111-117.
- 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 大学生のキャリアガイダンスの効果測定テストの開発 キャリアデザイン研究, 5, (2009), 127-139.
- Stumpf, S. A; Colarelli, S. M., & Hartman, K, Development of the career exploration survey (CES). *Journal of Vocational Behavior*, 22, (1983), 191-226.
- 高橋美保・石津和子・森田慎一郎 成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度の作成 臨床心理学 15(4), (2015), 507-516.
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁樹算男・大野裕・安藤寿康. Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討—パーソナリティ研究, 15, (2007), 276-289.
- 田澤実・梅崎修 キャリア意識が就職活動結果に与える影響—全国の就職活動生を対象にした縦断データより— 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, (2012), P302.
- 梅崎修・田澤実 大学生の学びとキャリア—入学前から卒業後までの継続調査の分析—法政大学出版社, (2013).
- 若松養亮 教員養成学部生における進路探索行動と意思決定の関連—11月時点の3年次生を対象に—, 滋賀大学教育学部紀要 教育科学, 56, (2006), 139-149.
- 湯口恭子 「アクション」「ビジョン」と進路決定自己効力に影響を与える大学生生活の主観的重要性 関西大学大学院心理学叢誌, 16, (2016), 53-60.
- 湯口恭子 ライフスタイル別に見たCAVT・進路決定自己効力感との関連— 第40回国際学校心理学会 (IPSA) 東京大会合同開催日本学校心理士会第20回発表抄録集, (2018), P121.